

# 『おくのほそ道』紀行・点と線

——永平寺から種ヶ浜まで—— (一)

横山 邦治

## 一

日光街道を完歩した時、室の八島へも寄り道をして芭蕉の『おくのほそ道』の行脚と少くも曾良の随行日記に「木沢と云所ヨリ左へ切ル」とある喜沢までは芭蕉主従と同じ街道を歩いたということから、『おくのほそ道』の行脚を思い立ち、その『おくのほそ道』の行脚の中で敦賀から大垣までが「駒に助けられて」と表現されているだけで、先行した曾良の随行日記とて芭蕉の行脚行程と一致しないこともあり、芭蕉がどの道を通ったか諸説あることとて、まずは最終コースからと歩き始めたのが種ヶ浜であったので、平成四年の行脚はその種ヶ浜を終着点とする企画を樹てた。この企画には前奏曲があった、昭和四十六年の八月十二日

から二十五日まで「文教弥次喜多道中記」と題して京都は三条大橋から江戸は日本橋まで、少くとも明治維新以後に堀られたトンネルは通らない東海道五十三次の行脚に参加したグループのいるクラス会が平成三年に開催され、『おくのほそ道』行脚の話しが出ると元気のいい中年の女性軍のなかから参加したいという声が出て来たのである。しかも永平寺から種ヶ浜までという予定を聞いて、現在は敦賀市の疋田という集落に住んでいる高橋由紀さん（旧姓藤倉さんで、私には高橋さんでは馴染まない）、由紀さんという名前以下は記述する。）が、福井から敦賀までの行程を下調べすると申し出て下さった。由紀さんは、東海道五十三次の行脚に参加しただけでなく、種ヶ浜から大垣への行脚の途次、敦賀から塩津街道を疋田に向っている広島文教女子大の一団をバスの中から望見し（疋田の御主人の御実家

の法事で偶然里帰りしており、法事の必要品を購入のため敦賀行のバスに乗っていたらしいのです。今ごろこんな格巧で街道を歩いている女子学生の一団となれば広島文教女子大の街道キャラバン部隊に違いないと推察し、その日の宿泊はこのあたりなるべしと見当をつけて電話をかけまくり、中之郷の水上さんという民宿になつかしい声を届けてくれた人で、奇遇に驚き酒の肴の差入れに感激したことを思い出す人なのである。その由紀さんが車を活用しての詳細な下調査した報告を受け、今回の『おくのほそ道』紀行は大成功なるべしと予感したことである。越前と若狭の国境にあたる木の芽峠を越えてみたいというのが、私にとっては今年の最大のテーマであったのであるけれど、ともあれ平成四年八月二十八日の旅立ちである。

## 二

二十八日早朝六時半、広島駅新幹線口の改札口前に全員集合命令、平常であれば若い人は半醒半眠の時刻なのだろうが、少しは緊張した面持で定刻に集合終了。七時四分発のひかり七十九号で京都駅まで直行、すぐ乗りかえて北陸本線の九時九分発スーパー電鳥三号で福井市へ向い、十時三十七分には福井駅に到着である、今は裏日本と呼ばれるところもスピードアップしているのである。徳川政権が

確立した関ヶ原の戦の後、北越の要として家康の次男結城秀康（豊臣秀吉の猶子になっていたために徳川政権を継ぎ得なかった。）が築城した福井城の威容を今に伝える堀や城壁の中に居る福井県庁を通り抜けると神明神社裏にある旅館神明で、今夜の宿とて荷物を置いて一休みである。今年には永平寺から出発というので、出発点の永平寺の宿坊で一夜の修行を終えてと計画したのだが、二十八日は満員ということになり、『おくのほそ道』の旅程とは逆になるのだけれど、最初に福井市周辺の芭蕉遺跡見学となつていたのである、そのことを神明のおかみさんに話すと大変親切な人で、それは貸切りバスで一周しなさいと京福電鉄に直接交渉、格安に値切つて遊休バス一台提供ということとなる。ガイドはもちろん不在であるが、臨時観光バス（市内運行バスの臨時転用であるらしい）の運転手さんが土地の人で、昔のことも知っておられるようで名ガイド役として発車オーライとなる。

永平寺を礼した芭蕉は、「福井は二里計なれば、夕飯したためて出るに、たそかれの路たどくし」という有様で等載を訪れる。松岡の天龍寺から永平寺に至り、永平寺で心ゆくまで参拝して門前町で夕食をすまし、三里あまりの道を夕刻に急いだのであろう。そして「あやしの小家」を訪れた、その等載の庵跡というところを最初に尋ねる。旧い街道を出来るだけ通ってもらうよう頼んだのであるが、

大きなバスなので無理は出来ない、城跡の西側の道を南下し足羽川に架る九十九橋を渡って数百米で左折すると左内公園である。幕末に安政の大獄で刑死した橋本左内を顕彰する公園らしく、橋本左内先生の銅像と小塚原の回向院から遺骸を改葬したという左内の墓を中心に橋本家の墓所がある、その南の片隅に小さく芭蕉宿泊地の記念碑と句碑が建っている。

等裁の家は、『市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕貝・へちまの延へかゝりて、鶏頭、簪木に戸ぼそをかくす』という状況である。源氏物語の夕顔の巻を念頭にわびしき風情の居宅を描き出しているものであり、その居宅は、『市中ひそかに引入て』というのであるから、一般に『町の中の物静かな処に引込んで』の意に解されているようである（『詳考奥の細道』参照）が、元禄ごろの左内公園周辺はそのようなところであつたのであろうか。福井城跡とは九頭竜川の支流足羽川を隔てて指呼の間、現在の足羽山公園の麓に広がる町並みの中に左内公園はあり、旧街道沿いの横丁に当たるところが等裁宅跡であつて、物静かなところというのではなさそうに思われる。左内公園の隣地にビジネス旅館景岳館というのが見える、何かと近代的な手を加えているけれど旧来のハタゴの風情も仄見えるビジネスホテルで、景岳（左内の号）と名乗る以上は明治維新後の命名であるに違いないけれど、昔日の街道筋の町屋の遺構を伝

えているのかも知れないと思うことである。城下から言えば少し町外れであるかも知れないが、街道筋の町屋でハタゴなども並んでいたところと類推できそうで、そうした町屋の中の等裁宅が『おくのほそ道』の記述どおりの隠宅であつたのかどうか疑問ではある。気楽に芭蕉に敦賀から種ヶ浜まで同道している等裁であつてみれば、老齢ということもあつて楽隠居という身分であつたかも知れないが、その職業とか身分とかも気にかかることである。居所の在り様から見ても富裕な町人の楽隠居の隠宅というのでもなさそうなので、小さなハタゴの老隠居が離れ座敷にでも住んでいたのでもあろうかなど、景岳館を見て類推することである。元禄頃のこの町内の町並みを調査していけば判明することであろうが、行きずりの見学者は勝手な妄想をめぐらすことである。

等裁を同道して敦賀に向かった芭蕉は、『漸白根が岳かくれて、比那が嵩あらはる。あさむづの橋をわたりて、玉江の蘆は穂に出にけり』と描写する、道行文風の美文である。白根が岳は白山のこと、標高二千七百二米で北陸第一の高峯であるが、比那が嵩は雛が岳とも日永岳とも、今は九頭竜川にやがて足羽川とともに合流する日野川中流にあつて日野山と呼ばれる山で、標高七百九十五米というのであるから白山に比肩すべくもない山である。白山は丸岡で晴れた日にかすかに見えると言うが、福井ではもう見えない

ように（福井市の南方の一部分では見えるところもあるという、新田哲夫氏談）、日野山は三国から武生に至る九頭竜川沿いの広沢な福井平野の南端にあつて低い山ながら目立つ山のようなのであるが、福井市内からは見えないようである。

『おくのほそ道』の「白根が岳云々」の一節は、越前の国を北陸道に沿って金津あたりから鯖江・武生と南下していく大観を表現しているのであり、そして「あさむづの橋云々」と福井近郊の歌枕の地を並べていくのである。そこには表現上の周到な心構えが、芭蕉の街道を歩いた実地体験の裏打ちとともに感得できるのである。

福井市郊外の歌枕の地である「あさむづの橋」と「玉江の蘆」は、芭蕉が歩んだであろう北陸道の南下していく道筋としては順序が逆に存在している。「玉江の橋」と何の変哲もない橋のたもとの民家前に説明板のある玉江二の橋が小さな溝川めいた虚空蔵川（狐川とも呼ぶそうである。）に架っているところが、玉江の歌枕の場所である、角川文庫の脚注にある『名所方角抄』に「麻生津といふ所に江川あり、これを玉江といふ」とある。源重之「夏刈の玉江の蘆を踏みしだき群れある鳥の立つ空ぞなき」（後拾遺集、夏）との説明以上のものではない。「麻生津」というのはあさむづの橋の存在するところの地名のごとくでもあるけれど。バスの運転手さんは、旧道は狭いというので福井鉄道の線路を左手に見ながら南下する国道八号線を通る、国

道沿いの風物は新開地風で旧趣は見られない。花堂（ハナンドウと訓むらしい、福井鉄道電車の花堂駅の近く。）のバス停を少し通り過ぎたところの橋上で、あの向うの橋のあるところが玉江ですよと西の方を指さす。歌枕の地というのは、佳景と称すべきは案外少ないものであるけれど、玉江というのはその最たるものであろうか、真新しい説明板に文化行政の努力の姿を見るのみである。それにしても最近の川は汚れているなと思う。これが自然の木の葉や雑草のゴミであるなら自然回帰で許せるのだけれども、ビニール類の残骸が散乱しているのは悲しい、場末の小川では一層その姿が浮き上ってくるようである。

花堂前から更に一里ばかり国道を南下すると浅水町という町名の残るところ、麻生津である。あさむづの橋は枕草子に、「橋はあさむづの橋」とあつて著名なところ、日野川の支流の朝六川に架る橋を言うようである。『大日本地名辞書』には、「朝六川」とあつて、「又麻生津川に作る、今立郡に発し西北流四里半、本郡に入り主計中村と浅水駅の間を過ぎ、江守に至り日野川に入る、此間二里余、朝六橋は浅水駅に在り」とある、浅水は「延喜式朝津駅の名残をとどめて小駅とす」と言う、今は延喜式云々という面影はないけれども、北陸道の宿駅の残影はうかがえる。郵便局があるので局員さんに宿駅の名残りはありませんかと聞いたけれども、さあと言うだけである。市内バスの終点で

あったそうで、一寸した溜り場の風情があり、残影を求めてウロウロしていると、郵便局の裏手に本陣跡の標示が見られる、もちろん標識だけで何も残存物は見られない。あたりは何となく街外れの感がありながら人家稠密で、それが宿駅の名残りなのであろう。橋は今様の造りで、朝六つの橋も隣りの新朝六つの橋も、名のみ残れりであって真新しい説明板で確認するだけである。

バスの運転手さんをお願いして、浅水から花堂近くまで旧街道の細い道を帰ってもらうこととなる、そこには、新しい国道沿いの風物とは全く異なる家並みが続いている。小さな祠堂やお宮やお寺がポツンポツンと適当な間隔で並んでいてこんもりした木立ちがあり、その間に新旧の民家が点在する、それは旅行く人が目を楽しませながら往来するにほどよい趣きを備えた道筋と言えようか。江戸期の街道というのは、瓦屋根や洋風の建物などはもちろんなくて過半が藁屋根の家並みであったには違いなければ、情趣としてはかくの如くであったであらう。そこにはガソリンスタンドとモーターカーショウウィンドウなどという近代적店頭はなく、井と井とせいぜい㊦と㊧が目立つという街道なのである。元禄の当時に㊦と㊧はなかったらうけれど、芭蕉の歩いたであらう街道の風趣を伝えてくれているのであろう。バスはその街道をゆるめると北上、家並みの在り様を堪能することである。

花堂を通り過ぎたあたりで右折し足羽川沿いに上流に向う、ここから芭蕉様とは縁のない一乗谷朝倉氏遺跡見学。福井を訪れたのだから近時発掘が進んで評判の一乗谷の戦国大名朝倉氏榮華の跡を見学しなくてはと言うことなのである。安波賀というところから足羽川の支流である一乗谷川を上流に向かって数百米、左に一乗城山、右に御茸山の間を広がる小さな谷間に朝倉館跡があるのである。発掘整理が終わっている朝倉館の遺構を中心に寺院と武家屋敷と町屋とが適正に配置された戦国末期の城下町の典型が、ここにまざまざと遺存するのである。館跡前の川向うの武家屋敷跡に昔の建物が再現されていたりで、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館ともども歴史の既往を感銘深く見廻ることである。織田信長に攻め亡ぼされた戦国末期の苛烈な歴史は、草木深い遺跡の中に立つ私どもの心を捕えるのであるが、芭蕉にとっては何であったであらうか、元禄期の一乗谷は農耕の地としてのみで意味があったのであろう。

バスは集落の点在する田畠の中の北上して九頭竜川の護岸沿いの町松岡へ向う、松岡は前年も立寄ったところで、筆塚・芭蕉塚とか芭蕉主従の像などのたまたまに変化はないけれど、今年は偶然のことながら、毎年八月二十七・八日の両日に境内の御像堂（門内の左手の小高いところにある小堂）を中心に行われる「御像祭り」の当日に当たっており、この祭りは松岡藩五万石の藩祖松平昌勝公を町を開い

た恩人として顕彰するもので、天竜寺の門前町の公道は交通止めとなっており、両側に屋台店が軒を並べて町の人が三三五五集まってきた。大都市の雑踏に比べるとバラバラという感じであるけれども、こうした落ち着いた屋敷町としては大にぎわいということであろう。町の子どもたちと席を並べながら屋台の軒先でカキ氷をかき込んだり、寺院内外のお祭り気分を満喫しようとする。門前町の造り酒屋の店頭で吟醸酒「黒龍」を買い求めたのも、お祭り気分に乗じたのである。左程大きな酒造会社とも思えない家構えであつたけれど、老舗という雰囲気はあつて、福井市内のデパートで聞いたところでは福井県内での有数の銘酒とのこと、昨年は寺院の門前までバスを乗り入れたので気付かなかつたお酒屋さんである。九頭竜川の伏流水と福井平野の精米とで作られた銘酒というのであろう、その夜の会食でいただいた感じではサラリとした味でした。

松岡からは一路福井市内に向う、バスで一巡ということで思いもかけず早々に一日目の予定は終了ということになり、夕刻まで神明旅館周辺から福井市内の繁華街の散策に出かける。浄土真宗の福井別院に出かけたけれど修覆中で門内にも入れない有様、福井城跡のお堀端は落着いた雰囲気、城の石垣は当代の名城としての面影を残している。足羽川を渡つて城下とは離れたところに泊まった芭蕉様も、この城壁は仰ぎ見たことであろう、夕暁けに映える黒い石垣は

美しい。

平成の神明で、黒龍で、夜は更ける。

### 三

二十九日、名勝東尋坊を尋ねなくては福井県に來た甲斐がないと今様の発想で、京福電鉄の三国芦原線で三国駅に向うのであるが、曾良の随行日記に見える新田塚を見るために新田塚駅から乗ることとする。神明旅館の近くのバス停から新田塚に向う、広い街道に面して石垣を廻らした祠が建てられている。太平記の立役者の一人である新田義貞の終焉の地とされるところ、明暦二年に藤島郷福万村の百姓嘉兵衛が古い兜を水田の中から掘り出し、福井藩主四代光通に献上、藩の軍学者井原番右衛門が新田義貞の兜と鑑定、この地を義貞戦死の地としたというのである。光通にしてみれば、大切な徳川宗家の先祖とされる義貞の兜ということになる。大喜びで顕彰となるのであろうが、眉唾ものの話ではある。とは言つても曾良が通った街道筋には、元禄の世とて「暦応元年閏七月二日 新田義貞戦死此地」との石碑が建っており、それなりの敬意が表される場であつたのであろう。当時は田圃の中であつたのであろうが、今は郊外の街中である。

新田塚から京福三国芦原線の新田塚駅までは一寸した道

のりである、大きな荷物を持ってテクテク歩くのは炎天のもとはあり大分難行と言える。電車に乗れば一気に三国駅の終点、学生諸嬢は東尋坊行きとなるが、私は『福井県の歴史散歩』（山川出版社）という小冊子片手に港町三国の近世の面影を残すという街の中を探訪することとする。タクシーで出村遊廓街のゴミゴミした通りをキョロキョロ眺めながら通過、繁華街の面影はなくて下町のうらぶれた風情であるが、案外繁昌していた当時も遊廓などというのはこういう悲哀感のあったものかも知れないなど思いながら三国神社に向う。旧い三国の港街の南端に位置し、こんもりした森の中に鎮座します神社で三国の惣社であるが、楼門は明治三年の創建、社殿は山王宮と称していた天保十年の完成というから、さほど旧い由緒のある文化財的建物でも神社でもなさそうである。境内も閑散としていて、私以外に人っ子一人もないという有様、夏の日差しをささげる巨木の影が涼しく、一瞬の安息を与えてくれる。境内を出て旧い町の中を北に向かって進む、江戸的情調の町並みを期待していたのであるけれども、今の生活を生きている人々の住む町であるから、今様の安直な店構えに改造した家並みが続いており、それはそれなりに活気ある田舎町の通りである。ところどころに旧い面影を残した豪商風の旧家も点在しており、昔日の繁昌したであろう港町であることを証している。『福井県の歴史散歩』の案内に従って

性海寺（真言宗・延文元年創建）や西光寺（浄土宗・鎌倉光明寺六世源普隨流開基）など町並みに残る寺院を探索する、冊子の地図では三国神社のすぐ傍にみられる性海寺を探すけれどもなかなか行き当らない、途中で二ヶ寺ばかりに迷い込む、浄土真宗の寺院などで、朽ちかけている建物を改修中であつたりで、何とも寺院の多い町だなと思うことがある。

性海寺らしきに小冊子片手に入っていくと、恰幅のいい押し出しの立派な紳士が声をかけて下さる、押し問答少々で『福井県の歴史散歩』（山川出版社）の編集委員長である印牧邦雄先生と判る、性海寺の御住職でもあるのである。御勤務先の福井工業大学付属福井高校長の職務を終えて御帰宅されたところらしかった。何かの縁と寺内を案内して下さる。赤瓦の本堂は大正九年の再建ということで興を失ない、本堂裏の墓地を案内していただく。タブ・シイ・ヤブツバキなどの古木が繁茂しており、椿寺とも呼ばれたという、薄暗いほどの樹の下を進むと大檀越森田家の大構えの墓地がある。森田家は現在でも大正期改築の豪邸が町内に残る三国の湊を代表する近世期からの豪商で、明治以降は銀行業（森田銀行、現在の福井銀行の前身）と醸造業で北陸有数の資産家であつたと小冊子に著してある。その他にも由緒あるらしき古墓が数多く並んでいるが、私の狭い知識を刺激する名前には行き当らない。印牧先生にお別れし

て西光寺に向かう、三国小女郎の墓がある浄土宗の寺というのであるが、性海寺の北西二百米ほどのところにあるこのことでウロウロしている間に町並みを抜けて出発点の三国駅に到着、北西という方角がよく判らないので仕様のないことである。近世の演劇や小説類に登場する三国小女郎の墓の在所には執着があるのであるが、時間の制限もあってアツサリ諦めることである、足も少々疲れ気味であった。

三国駅からはバスで丸岡まで、私自身は三度目にもなるうかという丸岡城見学であるけれど、学生諸嬢には必見として福井平野の肥沃な田園地帯を直線的に丸岡に向う。福井平野北端の要衝としての丸岡城は、丸岡の城下町の中に屹立していつ何時見ても雄大という感じを与える姿をバスの中から望見させてくれる、三層の天守閣であるにもかかわらずである。城下（城下町の城下というのではなくて、城の下ということ、小さなお城の岡の真下というぐらいの意味である。）の大衆食堂で少しおそ目の昼食をすませて丸岡城参上である。地方での観光行政の進捗状況によるのであるが、この丸岡城も参上する度に整備が進められているようである。古城という情調は次々に失われていくように思われるのであるが、昭和二十二年の福井地震によって倒壊したのを古材を用いて再建した天守閣は、日本最古の遺構と言われるだけの風格がただよっている。

大衆食堂や民家のある城下より逆の向い側の城下には記

念館などがあつて公園として整備されている、記念館の展示品などを見学して帰路につくと、城の丘をぐるりと大廻りすることとなつて汗ダクダクでバス停である。新田義貞の墓のあるという称念寺参りの気力も時間も失せてしまつて、永平寺行きのバスに乗る。今晚の宿は、永平寺の宿坊なのである。入口で宿泊の手続きをすませて、青坊主の目立つ僧侶によつて宿坊に案内される。まず歩行の姿勢とその時の手の組み方を教示されて、肅々と爽々と歩くことを命ぜられる。肅々と爽々を兼ねることは至難のことである。難行苦行（？）は覚悟の上とは申せ、旅館における接遇とは相当に内容が異なるごとくで、皆々不安そうに目を見合わせることである。無駄口一切無用。

グルグル廊下を経めぐつて宿坊の一室に案内される、冷暖房完備の鉄筋コンクリートの宿坊、広い部屋が与えられる。全く飾り気のない部屋であるが掲額はみられる、禅僧の書であろう。大勢の老若男女の宿泊とて、静かなざわめきが伝わる。荷物を片付けて寺内の案内、寛延二年建立という山門から七堂伽藍を見学する。山門が最も古い建造物というのであるから、道元禅師の時代の面影を残す堂塔は残っていないのである。傘松閣をはじめあちらこちらで改修補修中の建物が見られる、これだけの大伽藍となると保全していくことも大変なのである。ふと配布されたパンフの「禅の交」平成四年八月号の巻頭写真を見てみると、



曹洞宗梅花流創立四十周年記念奉讃大会とかでお言葉を述べておられる丹羽廉芳管長猊下という僧の顔は、昨年永平寺に参詣した時に僧堂内の行きずりに芭蕉の遺跡が見当らないことについて質問した高位の僧らしき人と酷似している。気軽に質問に答えて下さったのであるが、その時永平寺が七度も焼亡したことも教えられたのであるが、何も知らないことは申せ失礼なことをしたのかも知れないと思うことである。それにしても昨年の問答を想い出してさすが也と感銘することである。

堂内巡回後は少憩してたのしみにしている食事である。夕食は薬石というそうであるが、私ども大衆は若い僧侶に案内されて広い食堂に入り、食膳の前に列座、指導者の若い僧が食事の作法を明解に説明した後で「五観の偈」を朗々と唱する、奥深い美声で堂内に響き渡る。読経によって訓練された声なのであろうか、私どもが中学校の昼食時にボソボソと唱えていたのとはありがたさが違うようである。私ども広島高師付中南組に属していた者たちは、担任の後藤貞夫先生のご指導で、「五観の偈」のそれが何かを知りもしないで昼食時に唱和していたのである。当然のこと、「五観の偈」は戦時中の乏しい弁当の中味を思い出すという副作用を伴うものなのであるが、それが永平寺の言葉であるとは知らないことであつた、後藤先生が説明して下さっていたのであろうが、不勉強な生徒であつたから記憶もし

ていない始末である。朗々たる美声に聞き惚れながら、「五観の偈」も唱えようではかくも美しく聞けるものかと思うことである。独特な食器に盛られた精進料理は、空腹には美味と申すべきですが、大勢の人と一緒に無駄口無用で頂戴するのは気骨の折れる作業でありまして、修行と申すものの一斑をうかがうことである。芭蕉様は三百年あまり前の永平寺をただ単に「礼」されただけなのであろうか、修行のことに半日ぐらいは従つたのであろうか、この永平寺独特の精進料理を頂戴されたのであろうかなど思うことである。

食事の後で小憩あつて座禅堂で、座禅の真似事である、座禅の心構えと作法の説明を受けて、小さな丸い黒座布団を尻の下に敷いて虚心となるのである。一刻の座禅では虚心は無理なことで、禅の真髄に迫ることはむづかしいことである。芭蕉様の参禅は、どこまでの悟入であつたのであろうか、禅僧にとって風流の真髄を求めて旅する芭蕉の行為はどのように映じたのであろうか。大聖寺の域外での全昌寺では若い禅僧に短冊を与えたというのであるが、永平寺では何ごともなかったのであろうか。心澄ましながら、こんなことをアレコレかんがえているうちに参禅終了、九時に就寝である。翌朝は三時起床と聞いて心驚き、なかなか寝つかれないまま、寝入る努力をすることである。日ごろの生活の不安定がここに露呈する。静かに永平寺の夜は

更ける。

#### 四

三十日、朝三時に起床の合図、前夜から予告されていたことは言っても、朝三時の起床は常人には未経験であるだけにショボショボの目で集合、さすがに緊張して若い僧侶の先導で早朝の勤行の場へ、そして再びゾロゾロと会場を変えて説法を聞く。私には仏籬祖堂に入るなどという仏心が皆無のせい、感動という心情が湧いてこず、多くの信者さんたちの中で白けた気分で説法を聞いている感じである。早朝の清浄な空気は、勤行の朗々たる声明よりも薄明の外気の中に感じられて、つつい目戸外にはしる。そして朝食、礼儀正しく食事を終って次の行事は欠礼にて出発する、湯尾峠の踏破が待っているので日程が厳しいとの口実で早朝の出発なのであるが、今の若い娘さんにとって永平寺のお勤めは異次元のものと映じたのでありましようか、欠礼による早発ちとの議に反対意見とてなく、永平寺を早朝辞去したのでありました。ともあれ一度は体験してみてもよろしいものでありました。

京福電鉄の永平寺線の電車で山の中を通り抜け、九頭竜川沿いの松岡を経てJRの福井駅、ここから北陸本線の各駅停車の鈍行で由紀さんと約束通り今庄駅に向かう、今夜

の宿が今庄に設営してあるのである。福井から北陸道を南下すれば、鯖江と武生の宿場を通り越して南条・今庄となる。鯖江も武生も中規模な都市であるし、武生は中世までの府中である、何とか由緒多いところであるが、芭蕉は「あさむづの橋」からは「鶯の関を過て湯尾峠を越れば」とのみ、先行した曾良の記録にも「符中ニ至ルトキ、未の上刻、小雨ス。艮、止。申ノ下刻、今庄ニ着、宿。」とあって、武生を符中として通過したことを記するのみというので、鯖江と武生は無視することとする、行脚の目的からすれば邪道であるが車窓から町並みをながめるだけである。

今庄の駅に降り立つと由紀さんが待ち構えていて久闊を叙したのであるが、「先生、歳とつたなあ！」が第一声である、前の年にクラス会で面談していることとて驚くこととてないはずであるが、ピチピチギヤルの中に鶴群の一鶏の如き老齢のオジイチャンが居ると目立つのであろう。東海道を踏破した時のことを思えば、何もかも老化現象を生じていることとて今さら覆い隠す術とてないのであるが、一瞬「行脚も限界なのかな！」と思ったことである。

北陸本線の田舎駅と思って降り立った今庄駅は、新築の駅舎で旧街道より入り込んだところにあるせいか新開地の雰囲気、線路ごしに町役場とか今夜の宿舎である今庄サイクリングターミナルがある、豊かな自然の残っていることを利用して町の活性化を企画しているのである。収容人員

百十名の宿泊施設であるが、利用効率はどのようなのであろうか。私どものキャラバンが泊まった日には、他の同宿者は見当たらないようであった。ここからは由紀さんの指揮下で行動するのであるが、荷物を置いてJRで南条駅まで引き返すこととなる、南条の宿場と今庄の宿場の間にあるはずの「鶯の関を過て湯尾峠を越れば」という関所跡と峠を越えるためである。

南条駅で昼食をと食堂を探すけれど閉店ばかり、駅弁もなく、結局スーパで適当に食糧を買い込んで旧道を歩き始める。駅前の日野川沿いに広い国道が出来ているが、その国道沿いにスーパとかレストランとかが点在しているのであるが、その国道に並行した西側に古い商店がほんの数店並ぶ旧道が南下している。しばらく歩いてJRの線路を横切って進むと蓮光坊山（二一四・四米）の山麓沿いの野道が続く、関ヶ鼻というところに小さな神社が右側の山麓にあり、鶯の関跡の大きな石柱が立っている。涼しい木陰なので路傍で昼食とピクニックの気分である、村社の石段に腰掛けてガヤガヤザワザワ賑やかなことであるが、人っ子一人通らないので無作法をわびることもない、鶯の関の村社に最敬礼である。

鯖波という小集落に着くと、清水の湧いていたらしいところにポンプがあり、明治天皇の休憩所という一きわ大きな石柱が建っている。ポンプをくんで真水一杯、目の前に

トンネルと坂道と二つの道が見える。トンネルを抜けるのは邪道也と坂道を登ると、ここにも小さな村社があり、坂道は行き止まりになっている。

昔は道が通じていただろうにとトンネルを抜けると、JRの線路を左に見て野路を南下する。遙か遠くに湯尾峠と言われる山並が見える、日野川が大きく蛇行していて、そこに鍋倉山（五百十六米）から三ヶ所山（二百二十四米）に至る尾根が突き出ており、鍋倉山と三ヶ所山の接点で少し低くなっているところが湯尾峠と言う。現在の国道は日野川沿いに大きく迂回して山の向うに通じているのであるが、峠はその山を登って降りるのだけれども直行する形になっている、近代的な北陸本線や北陸自動車道はトンネルで直行するのである。ともあれ遙か遠くにみえかくれする峠に向かつて歩き続ける、旧街道が全て残っているわけでもない、新国道に出たり北陸自動車道の下を横切ったり、田圃の中の野道であったり製材所の中であったりであるけれども、とにかく出来るかぎり峠に直行して近付くことである。湯尾の小集落に入ると、前もって調査してにくれた由紀さんの案内で、往來の途絶えるまで峠の頂上で茶店を開き効験ありと信仰を集めていた「いもの神」のお札を売っていたという末口悦さん宅を訪問、「日本大厄神三社権迹畧縁起」文安二年写一卷とか略縁起版本、孫嫡子守り札、守り札木印（参詣者にこの木印を押したお守り札を

売っていたのであろう。)、それに「疫病神」の神額などを拝見させていただく。往来の旅人が多くて、天然痘が業病として恐れられていたころは随分繁昌した疫病神であり、主要街道の茶店としての機能と併せもって著名な茶店であったのであろう。今では麓の集落に移居して疫病神だけはお守りしているという、*「藤倉の記に曰」*で始まる縁起は藤倉山(鍋倉山と尾根伝いで六百四十三・五米、この藤倉山から鍋倉山一帯にかけては光明聖寺本堂を始め天台宗一千坊があったとの口承があるという。)と何か因縁でもあるのであろうか、ただ拝見するだけで調査するに至らない。

末口家を辞去して湯尾の小集落(と申しましても郵便局もお寺も小学校もあります。)を通り過ぎて湯尾峠、峠の入口に今ごろのこととて説明板が掲示してあって道に迷うことはない。中途までは一寸した登り道であるが、百米も登ると急坂となり、ジグザグ道となり足元を見おろすと断崖となつて危険を感じるところさえある道である。草刈りやされた痕跡があり、街道として処理されているのは末口さんなどの心遣いでもあろうか、山尾根の鞍部である峠の頂上に至ると、右手の岡の途中に小さな神社が見える、孫嫡子神社と称しているものを祭つてあるのである。茶店(末口家・三田村家・柴田家・野村家の四軒の店があつたという。)のあつた跡と思われる広場が休憩所のようになつていて、腰を掛けられる亭もある。いもの神様に一応敬意を表して

茶店跡で一休み、

月に名をつつみ兼てやいもの神

の句を残した芭蕉(峠に新しい句碑が建てられている。)も、この茶店で一息ついたに違いなかったが、湯尾から鯖波にかけての日野川沿いの景色が左程印象深いものとして残像がないのは、繁茂した樹々の葉末に隠見した故為か(今庄側の景色は全くうかがうことは出来なかった。)、息切れで景色を楽しむ余裕がなかったかのどちらかであつたろう。

下りの道は急坂であるが、急峻ではない、繁茂した樹々のトンネルの下をくぐり抜けるように馳せ降る、二三度屈曲すると下方にJ Rのトンネルの入口が見えてくる。下方に線路をみながら細い道を恐る恐る線路の側まで降り立つ、しばらく進むと、少し整備された旧街道らしき道にでる。今庄の宿場である。

寺と神社と小祠とが程よく点在した宿場、妻籠のように江戸期の風趣を保存しようと努力している形跡はないのであるが、ふつと昔風の造り酒屋さんをのぞいて見ると、全く江戸期そのままの木組みが残っており、感激して鳴り瓢という銘酒を買い求める。今庄は珪石の岩肌から滲み出た良質の水が銘酒を産むとかで、江戸期には十二軒の造り酒屋があつたそうであるが、今では鳴り瓢の外に聖乃御代、白駒、百貴船の四軒になつてゐるそうである。堀内さんという造り酒屋さんから少し進むと旧加賀藩の本陣北村家の

跡があり、洋館三階建ての立派な建物が建っている。昭和五年に田中和吉という人が社会教化と福祉のために建てた啓潤会館という建物、今では公民館として活用されているという。本陣がないと目玉商品がないのと同じで、宿場の風趣も色あせてくるのであるけれど、それも時代の流れとて止むを得ないことである。街道中ほどで左折し、今庄駅前を通り抜けてサイクリング・ターミナル直行、峠越えで疲れ果てたのである。夕刻、由紀さんの同級生で同じ東海道行脚組の滝川（旧姓吉中）さんが合流、今日福井に着いて等裁宅跡など芭蕉に縁のある旧跡を尋ね歩いたとのこと、峠と一緒に歩けばよかつたのにと話しあったことである。その夜の夕食は鳴り瓢を賞味、天龍寺門前の銘酒黒龍よりコクがあるというのが、娘子軍の評判でありました。

## 五

『鶯の関を過て湯尾峠を越れば』と記する「峠」の字は、『おくのほそ道』ではここにだけ見られる表現である。そのことについて「広島文教通信」に雑文を書いているので転記する。

峠という字は、漢字ではなくて国字です。大漢和辞典には、国字と明示してありまして、

たうげ。たむけの音便。山を過ぎる往還の絶頂のところ。此処で道祖神に手向して旅路の安穩を祈ったので称した。とあります。そして和漢三才図会の倭字としての解説「峠、山嶺之字、山路当三上而下、会意」が引用されています。会意というのは、二つ以上の漢字を合わせて一つの字を作り、その意味を合成する漢字の構成法で、要は山・上・下の三つの漢字を合体させて峠としたもの、それが日本で作られたのです。山を上り下りすれば峠、極めて合理的造字なのですが、それが中国で出来ていなくて、何故日本で出来たのかなと思うことです。

芭蕉の『おくのほそ道』では、峠という字が一度だけ使われています。越前から若狭の国へ抜けるところに「鶯の関を過て湯尾峠を越れば燧か城かへるやまに夜鷹を聞て十四日の夕くれつるかの津に宿をもとむ」と、峠の名として出てくるのです。峠そのものの記述ではありません。

『おくのほそ道』の旅は、千住宿を起点として奥羽・北陸の各地を経巡って大垣まで、日数にして百五十日、街道里程はおおよそ六百里にも及ぶという長い旅です。当然のこと、芭蕉と曾良の同行は沢山の峠を越えているはずで、関東平野を日光まで、黒羽から白河の関を越えて仙台へ、石巻から平泉までという道筋には、著名な峠というのはあまり見あたりませんが、鳴子あたりから出羽山地の山越えとなり、羽後・越後・越中加賀・越前の国越えには、多く

の山地を越えていかなくはなりません。

『おくのほそ道』の記述で有名なのは、鳴子から羽前へ越える中山越え、堺田から尾花沢に至る山刀伐峠、越中から加賀の国境である倶利伽羅峠などです。これらの記述には、大山とか谷とかという表現しかなくて、峠の字はみえません、古戦場であり難所として知られる倶利伽羅も、卯の花山倶利伽羅が谷を越えて”と見えるだけです。山刀伐も倶利伽羅も踏破してみますと、大変な難路で峠ですのに、芭蕉は峠という表現を用いていないのです。

平成四年の夏、広島文教女子大学の『おくのほそ道』行脚部隊は湯尾峠を越えたのでした。JR南条駅から南下するのですが、旧北陸街道を進み、鶯の関旧跡を通り過ぎるあたりから前方を望むと、野道がはるか続く先に峠のあるという山の連なりが見えます。山の東端は低くなっている、その麓を日野川が流れ下っているのですが、今の国道はその麓を大きく迂回して日野川沿いに走っているのですが、湯尾の峠は今庄宿に至る直線の最短距離のところで、しかも山の連なりの最も低いところにあるようでした。

峠は相当の急坂を登るようです。ジグザグ道を右に左にと辿るのです。頂上には有名な疱瘡の神様の祠があり、江戸期には二三軒の茶屋があったという広場もあって、今は小さな亭があります。一休みして下り始めますと、これも急なジグザグ道で小走りに降りる状態で、JRの鉄道の近

くに降り立ちます。JRはトンネルを抜けているのですが、峠道は登り始めとほぼ同一の標高のところに降り立つ形で出来ているのです。峠道としては、今庄宿から敦賀に抜ける木の芽峠のような難路に比すると、典型的という印象なのです。芭蕉は、その典型性の印象に基づいて湯尾峠という特定の峠の名を印象深く記録したのではないのでしょうか。そして広大な中国の国土の中には、島国日本にあるような峠は少ないのかなと思ったりするのです。余白がありません、考えながら歩くことは楽しいことです。大学は、考える楽しみを学ぶところです。

“余白がありません”未練たっぷりなのは、私の語感から“峠”という字と訓みについて疑問に思ったことがあったからである。安芸の国に生まれ、育った私には、“トウゲ”という言葉がないのである。広島から可部に至る街道で唯一一つ小高い岡があるけれども、その岡を越えるところを“八木ダオ”と呼ぶ、私の在所の鈴張から可部に抜ける街道の山地を“狼ダオ”と“坊地ケダオ”と呼ぶ、八重に抜ける街道の山地越えを“明神ダオ”と呼ぶ。いわゆる峠を“タオ”と呼ぶのである。一ヶ所だけトウゲと呼び慣れているところがある、飯室から行森へ抜ける幕の内峠である。この峠は、明治になって新しい国道を造った時に開発された峠であって、それをトウゲと呼ぶのである。明治維

新以前からある峠は、全てタオと呼ぶ習慣なのである。幕の内峠は、明治維新以後、標準語化した江戸の言葉によって東国系言語体系に即してトウゲと呼び慣れたものではなかったろうか。とすれば安芸国人の私の生活、語彙のなかには、峠は、「タオ」と呼ぶという言語意識しかないということになるのである。

方言学的手法による地名学なる見地から、鏡味明克氏に「峠」論があり、それによれば大よそ西国は「タオ」であり東国は「トウゲ」であるという（鏡味明克著『地名学入門』大修館書店、『岩波講座・日本語12・日本語の系統と歴史』所収「地名の起源」岩波書店など）。国鉄の駅名からのエッセイであるが、「峠」をどう読むか―東のトウゲ、西のタオ―（白木進（『日本語』18・1）という立論もある。方言地理学的手法による全国的規模の調査報告は見当らないようであるが、東国はトウゲと称し、西国はタオと称するのが一般のようである。越前と若狭の国が東国か西国かは微妙なところであろうが、湯尾峠の茶屋の子孫の方は、確かに「トウゲのチャヤ」と言われていたし、越前の生まれである本学の新田哲夫氏（峠論は新田氏の教示による。）の語感でも「ユノオトウゲ」だと確言される。ここは「ユノオダオ」とは呼ばなかったと断じてよいであろう、それを芭蕉は「湯尾峠」と著録したのである。

鏡味氏の論によれば（山口恵一郎編著『地図と地名』古今

書院・一九七四年刊所収「地名の言語学的諸問題と展望」、鏡味完二作図による「峠名による地域区分」拠って、「タオ」系と「ゴエ」系が関西以西に主流であり、「サカ」系と「トウゲ」系が東の方にあることから、「タオ」と「ゴエ」とが合成されて東の方の「トウゲ」になったと推論しておられるが、その作図を見ると越前は「サカ」系の地域に入っており、伊賀上野を含む関西圏は「ゴエ」系地域に入っている。芭蕉自身の語感としては、私の「タオ」系語感とは異なつて、浄瑠璃や実録でよく見る「伊賀越」の「コエ」系語感を有していたのであろうか。ともあれ芭蕉には「トウゲ」系語感はなかったのではなかったか、そうであればこそ山刀伐峠を大山と形容し、象潟に向う海岸線の山地を山を越と形容し、俱利伽羅峠を俱利伽羅が谷と形容し、そして湯尾に至って始めて峠の名を記す、それはいもの神を祭る著名な峠として印象深く芭蕉の脳裏に刻されていて著録されたのであつたろう。登りと降りとは典型的な峠道ということもあつたであろうが、恐らく芭蕉も休息したであろう峠の茶屋で、土地の言葉として「ユノオトウゲ」の発声を印象深く聞いたかも知れないと思うことである。今庄の宿場から敦賀に至る難路である木の芽峠については、『おくのほそ道』では一言も触れられていない、芭蕉にとつて印象深い何も残らなかったものであろうか。